

News Letter

中国では絶景という場所には観楼と呼ばれる建物を建てる習慣がある。観楼を建てることにより、より風景が引き締まるのだという。

ひるがえて日本の風景を見てみたい。春には満々と水を満たし、秋には黄金色の実りをもたらす水田、山肌に登るような棚田あるいは山畑、巧緻なまでに張り巡らされた水路、かつては薪炭と

山の幸、また今でも絶えることなく澄んだ水を供給する森林。そして集落。そのかたわらには必ず常緑樹の緑の塊が小丘のようにぽつんぽつんと点在している。その緑の塊は、多くの場合、神社＝鎮守の森であることが多い。これが私たちの国の風景の一典型といえることができるだろうか？

鎮守の森のある風景



面

鎮守の森の本

この景色は、大都市を除けばまだまだ目にする機会が多い。フィールドを歩いていて思う。一体私たちの先祖はどれだけの鎮守の森を創り守り伝えてきたのだろうか。神社本庁によれば、有格社だけでも80,000社以上と言う。無格社を含めればその数はきっと数倍にはなるだろう。集落ごとに複数の神宿る御神木や岩座を祀り、神聖を抱き、膨大な数の「土地の神を巫ます森」を産みだしてきた。このことは1/25,000地形図を用意して、神社の凡例に印を付けていけば、思いのほか、印が付くことで良く判る。

私はよく、もしこの国に鎮守の森がな

かったらどんな風景になってしまうのだろうかということを考えてみる。なんと寂しい風景だろう。フクロウやムササビの鳴き声を聞き、アオバズクやブッポウソウの訪れに初夏を感じるという機会は減ってしまう。また、オニヤンマを追い、タマムシの美しさに息を呑むことや、真夏日のもと、鎮守の境内で涼しさに癒されることも少なくなる。イカルの大群の突然の出現に冬を感じることも珍しいことになるだろう。

かつて南方熊楠は、神社合併に反対する理由の一つに、手水鉢の中の

藻類が神社ごとに違っていることを挙げた。現代で言えば、まさに生物多様性の保全の視点である。鎮守の森にはその土地の潜在植生があることはよく知られるようになったが、同様に綾織りなす多様な日本の動物相も鎮守の森に箱舟のように残ってきたことが最近次々と明らかになってきた。

私たちはこの連綿と受け継がれてきた財産の存在にはたして十分に気づいているだろうか。私はこの風景をこの国の絶景の一典型としていつまでも受け継いでいきたいと思う。

(東京本社自然環境研究室 重昆達也)

目次

エッセイ	鎮守の森のある風景	_____	1
業務紹介	水生生物調査とは？	_____	2
マンガ	調査員物語	_____	5

Report	白神岬の野鳥の渡り	_____	6
	ある日のフィールドノートから	_____	8

どこにでもいるものとどこにでもいないもの